

James S. Grubb ;

*Provincial Families of the Renaissance:**Private and Public Life in the Veneto*

ジエームズ・S・グラブ著

『ルネサンス期の地方都市における家族

——ヴェネト地方における私的生活と公的生活——』

藤内 哲也

近年の社会史や家族史研究の進展により、中世・ルネサンス期のイタリア諸都市に生きる人々の日常生活が、我々の前に鮮やかに描き出されるようになった。都市に暮らす商人らが残した様々な手稿史料を使って、都市の日常生活や商業のあり方を再構成し、また彼らの心性や行動規範を探ろうとする試みは、フィレンツェやトスカーナ地方に関する研究を中心にこれまでも豊富な蓄積があり、わが国においても多くの成果が上げられている。本書は、こうした研究史の潮流を背景に、様々な形式や内容を含む覚書や家族年代記などの私的な文書を基本史料として、イタリア北部に

位置するヴェネト地方の二つの都市、すなわちヴェローナとヴィチエンツァにおける日常生活の諸相を明らかにしようとしたものである。筆者のJ・S・グラブは、これまでもヴェネツィアやヴェネト地方に関する研究を発表してきたが、その近著である本書の意義は、すでに多くの研究が積み重ねられてきた、中世・ルネサンス期におけるイタリア諸都市についての社会史・家族史研究に、新たなケース・スタディを付け加えるということだけにあるのではない。「イントロダクション」において述べられるように、筆者はこれまでの成果を十分に吸収しながらも、そこにいくつかの問題点を見出し、その批判として新たな視点を導入しようとしているのである。

筆者が批判するのは、従来の研究史における対象の地理的、社会的な偏重である。これまでの中世・ルネサンス期のイタリア諸都市に関する社会史や家族史研究は、フィレンツェやトスカーナ地方を中心に進められ、そのほかヴェネツィアやジェノヴァなどの海外貿易で栄える大都市が対象とされてきた。しかしながら筆者は、これらの国際的な大都市とは性格の異なる地域中心な都市について考察することの重要性を主張する。ここでとりあげられるのは、一五世紀のヴェネト地方の都市、とりわけヴェローナとヴィチエンツァであるが、フィレンツェやヴェネツィアといった国際商業都市をもつてイタリア都市社会を一般化するのではなく、規模の小さな地方都市との比較によって、先行研究が描く都市生活のイメージに修正を迫ろうとするのである。

また筆者は、エリート層と下層の社会層やマイノリティーに関心が二極分化していたこれまでの社会史研究の動向を批判し、中

間層 the middle class sort に注意を向けるべきだとする。筆者のいうこの中間層がどういった階層を指すのか、その定義の曖昧さは否めないが、しかしながら、ここではひとまず筆者の批判に耳を傾け、本書の内容をみていくことにしよう。もとより、多岐にわたる内容や論点のすべてをここで紹介することはできないが、以下、本書の概要をまとめ、そのうえで評者の関心に基づきながら若干の感想を述べ、問題点を指摘したい。

二

第一章「結婚 Marriage」の第二章「子供 Children」、および第三章「死 Death」は、ヴェネト地方の都市における平均的な家族像を明らかにするとともに、個人のライフ・サイクルと家族の「戦略」との関わりについて考察されている。相互に関連するこれらの三章については、まとめて紹介したい。

まず、筆者が史料として利用した覚書類の記録から、ヴェローナやヴィチエンツァに暮らす人々のライフ・サイクルが、結婚を出発点として再構成される。両都市における結婚時の年齢は、男性が再婚等も含め平均二六才程度であり、フィレンツェやヴェネツィア貴族などの場合と比べてかなり若いのに対し、女性は二〇才前後と、逆にフィレンツェやヴェネツィアと比べて四、五才程度年長となっている。すなわち、ヴェネト地方の都市においては、夫婦間の年齢差が小さいのである。そして、一組の夫婦からは平均して七人の子供が産まれているが、これはフィレンツェと比べて一人多く、しかも出産間隔は長い。その要因として筆者は男性の結婚年齢が低いことを挙げ、さらにそれを可能とした社会的要

因、すなわち一般に経済的な自立の前に結婚するという慣習の存在を指摘するのである。また、このことは父親と子供の間の年齢差の縮小をも導き、そこから母親とともに子育てに積極的に参加する父親の姿が見出されることとなる。一方、ヴェネト地方においては一般に子供の死亡率は低いものの、それでも子供の約四割は二〇歳を迎えることなく死亡しており、しかもその間は男子の方が死亡率が高いのに対し、二、三〇代においては逆に女子の死亡率が高くなっている。その要因は出産の危険性にあるが、この成人女性の死亡率の高さが、男性の婚姻年齢の低さとあいまって、男性の寡夫を増加させることとなった。

次に、結婚や子供の誕生・養育などを通じて看取できる人々の心性や行動についてみてみよう。第一に指摘できるのは、なによりも家産を維持しようとする家族の「戦略」である。これは、他都市と同様、子供の結婚を制限することに端的に示されるが、その目的は分割相続による家産の細分化や増大する嫁資の負担を免れることにある。さらに、寡婦による嫁資の返還請求を妨げるために、遺言において寡婦に家族の養育や監督を委ね、婚家にとどまるよう求める例も多い。また、一般に子供の成長に関する記述が少なく、とりわけ女子について冷淡であるように思われる一方で、男子については、嫡出の相続人がいない場合それに代わる可能性のある庶出子についての記述もみられることも、こうした家産の維持を第一とする心性を示すといえよう。

第二に、宗教的・文化的な規範と現実の行動との「ズレ」を指摘することができる。キリスト教や人文主義思想は人々の生活にも浸透し、結婚や出産、子供の養育、家族の死などに関する時期

の選択や儀式の内容に対し様々な制約を課していたが、こうした規範は必要に応じて受容され、あるいは無視された。これは、当時の人々の信仰に対する敬虔さを否定するものではなく、むしろ現実世界における、いわば「したたかさ」として解釈されるべきであろう。また、子供につけられた名前の変遷や遺言書の内容からは、宗教的な集合心性の変化をみることができるが、こうした点については第八章であらためて考察されることとなる。ただ、ここで指摘されるような規範と現実の「ズレ」に関して、記録を残した都市の住民たちがどのようなプロセスによって規範を選択、受容し、あるいはそれを変容させていったのかといった点についての考察は不十分であるように思われた。

第三点として、結婚や子供の洗礼における名付け親の選択などを通じて確認できる、都市社会での人的な結合関係の重要性が挙げられる。とりわけ婚姻を通じて結びついた親族間の経済的・社会的な重要性は、父系親族中心という伝統的なイメージと異なる点として評価されている。さらに、こうした人的な結合関係の形成が、その家系の社会的な立場の再確認や上昇の機会であることも重要であろう。筆者はヴィチエンツァのアルナルデイ家を例として、社会的威信の蓄積とともに、より上層の貴族家系と婚姻関係を結ぼうとする家族の「戦略」を明らかにするのである。

このように、結婚や子供の出生・養育などから再構成されるヴェネト地方の家族像は、基本的にはこれまでのイタリア諸都市に關する研究が描いてきた家族像と大きな違いはみられない。しかしながら、結婚年齢などで独自のパターンが認められ、その結果これまでの大都市中心の家族像に修正を迫っているといえよう。

この点は本書の成果として率直に認められるべきである。とはいえ、こうした結婚行動や家族の「戦略」などは、地域や都市規模による相違とともに、その家族が属する社会層における相違もまた重要なものではないだろうか。こうした点についての筆者の関心があまり明確でなく、十分に検討されていないことが惜しまれる。

第四章「世帯と家族 Household and family」では、ヴェネト地方の都市における世帯構造が問題とされるが、ここで重視されるのは、結婚した複数の家族や婚姻によって結びついた親族をも含む、複雑で拡大した世帯構造である。統計的には単核世帯が多数を占めるものの、筆者は前近代における単純な世帯構造を過度に強調することに対して注意を促し、多様な構造を持つ世帯の存在に目を向けるのである。こうした世帯は、すでに指摘したように、遺言によって寡婦にその管理が委ねられる場合も多かったとはいえ、実際には家産を継承した長子などが家族や未婚の兄弟の世話をするのが一般的であった。またヴェローナやヴィチエンツァでは、男子均分相続が原則でありながら、結婚制限などによって家産の細分化を防ごうとしていたことについてもすでに述べたが、そのために他の地域で広く採用されていた信託遺贈の制度があまりみられないことは特徴的である。さらに、ヴェネト地方の家族においては、家系の紋章が尊重され、覚書において祖先に関する記述もみられる一方で、遺言書で親族ではなく友人を資産管理人として指定したり、家系の墓所以外の場所への埋葬を希望するなど、一般に親族意識は希薄でその結びつきは弱く、直系親族や配偶者の家族以外にはそれほど大きな広がりを見せていなかったといえる。親族の間での土地の共有なども短期間のものが多く、広

義の親族集団は経済的な共同体としてもあまり機能していなかったのである。しかしながら、こうした世帯構造や親族意識に関しても、地域差とともに社会階層間の差異を想定すべきであり、その点に不満が残る。

ヴェネト地方の家族の経済活動については、第五章「仕事[Work]」と第六章「土地[Land]」が当てられている。これらの章については、収入獲得の手段としての職業と、その社会的な評価という二つの視点から内容をまとめてみたい。

本書がとりあげている多くの家族は、都市経済の最重要部門である毛織物をはじめとする商業や金融業、公証人としての活動、そして土地投資など、実に多様な経済活動を展開している。ヴェネト地方においては小規模の商社が一般的であり、毛織物などの輸出は他都市の商人に委ねられていた。ここからもヴェネト地方の都市が地域中心としての機能を果たしていたことが確認できるのである。また、上質の毛織物製品を産出していたヴェローナが、ヴェネツィア政府に対抗して独自の輸出ルートを開拓しようとしていたのに対し、ヴィチエンツァは逆にヴェネツィアを通じて輸出し、そのためにヴェネツィアにおける商業特権を獲得していたことは注目すべきであろう。すでにヴェネツィアの支配下に入っていた両都市におけるこうした態度の相違は、商人のヴェネツィアに対する感情や社会的上昇の指向性にも影響すると思われるからである。一方、一五世紀末頃から登場する金融業において特徴的なのは、時に世代を越えて継承されるような長期の貸借関係である。これが現物貸借などとあいまって、慢性的な貨幣不足によ

る商業活動の停滞を緩和していたと筆者は指摘している。

商業とならんで重要なのが公証人としての活動であるが、その業務はほとんどの場合断続的に行われる程度であった。よって、公証人として活動することは、それによって得られる収入ではなく、社会的威信の高さを示すことに主たる目的があったといえよう。公証人の職業団体は、法律家や医師のそれと並んで、商人や手工業者のギルドより高い地位を与えられ、なかには都市の行政官職に就任して市政に関与するものもいたのである。さらに、ヴェネト地方の商人層は農村への土地投資も行うようになっていたが、これも商業からの撤退や資本の分散といった経済的な戦略というよりも、むしろ社会的上昇を達成するための手段として解釈される。前述のアルナルデイ家の例が示すような商業から公証人活動、さらに農業経営への進出は、いわば一連の社会的上昇の過程として理解できるのである。もちろんヴェネト地方においても、散在する土地の集約や未耕地の開拓、ブドウなどの混合栽培の導入や収穫に応じた短期の労働契約の普及などといった穏健な改革が進められ、効率的な農業経営が指向されていたことも指摘されている。また、厳しい生活を強いられた農民のなかには、土地所有者への反抗や長期にわたる地代滞納などを行うことも珍しくなかったが、とはいえ所有者とテナント農民との間には一種のパトロネージ関係が成立しており、都市内だけでなく農村にまで広がった人的結合関係を看取できるのである。

第七章「貴族 [Patriciate and Nobility]」では、都市の支配層である貴族に焦点が当てられる。ヴェネト地方の各都市においては、貴族を称する政治的なエリート層が権力を握っていたが、貴族の

定義はきわめて曖昧であり、階層として閉鎖化の傾向を示すといえ、新たな家系の上昇も可能であった。そのため、貴族としての社会的な認知を得るためには、帝国や教会による騎士身分への叙任や都市の官職への就任、あるいは富の蓄積や貴族にふさわしい生活様式の維持など、様々な要素によって貴族性を蓄積し、それを維持していくことが重要だったのである。たとえば、アルナルディ家が商業から公証人、さらには農業経営へと進出し、高位の行政官職にもたびたび選出されるようになるつれて、自他ともに貴族として認められるようになり、また他の貴族家系と婚姻関係を結ぶようになっていったことは、まさにこうした貴族性の獲得による社会的上昇の典型的な成功例であるといえよう。ところで、こうした貴族層は都市の政治的・社会的あるいは経済的なエリート層であったが、こうした社会層をとりあげて論じることと、中間層を対象に据えるという筆者の問題設定とはどのように整合するのか、大いに疑問である。この点については後に少し論じてみたい。

本書の基本史料である覚書類には、宗教的なミサへの参加や有名な修道士による説教、あるいは教区司祭や修道院に関する記述などもみることができる。そうした側面について考察したが、第八章「心性と宗教 Spirituality and Religion」である。ヴィチエンツァにおいても、またヴェローナにおいても、ミサへの参加や聖体・聖人崇敬の隆盛、教区教会の運営・管理など、人々は宗教活動に積極的に参加し、また覚書のなかにも様々な経句を筆写していた。しかしながら、ここで看取し得るのは、そうした活動を通じて将来を予測し、特定の問題に対する実効的な効果を期待

しようとする姿である。彼らは、自分たちの必要に応じてしたかに信仰を選択し、受容し、時にはその中身を変容しさえしていた。また、覚書中の記述には教区司祭への不満や司教選出に対する関心がみられる一方で、より高位の聖職者や教皇に関する記述は少ない。よって彼らの宗教的な関心は、都市の教会で行われるミサや秘蹟、あるいは聖人崇敬や修道院への寄進など、何よりも身近な活動にあり、またそうした活動を通じて実効的な利益を引き出すことにあったといえよう。

最後に「エピソード」において、筆者は本書での考察を振り返り、覚書のなかに現れてくる人々の経験や思考が、「ハイ・カルチャーの規範や思想を選択的に受容し、両者の間にある種の「ズレ」が生じていることをあらためて指摘する。さらに、本書のようなケース・スタディから得られた結果をどこまで一般化しえるのかという問題を提起しているが、換言すれば、これはそれぞれの都市に固有の事情による特殊性と都市としての一般性をどのように昇華させるかという問題であろう。しかしながら、本書では随所で他の地域との比較がなされているものの、筆者自身はこの問題に対する明確な結論を示していない。

三

以上、本書の概要を紹介してきたが、最後に全体を通読しての評者の感想を述べておく。冒頭で触れたように、本書においては大きく二つの問題が提起されていたが、まず対象となる社会層の問題について考えてみたい。すでに指摘したことであるが、本書はこれまで看過されがちであった中間層に焦点を当てることを意

図していたにもかかわらず、実際には貴族を含む上層階層、あるいはそこへの社会的上昇を実現しつつある階層が主体となつているとの観は否めない。それには、エリート層や中間層という階層の定義が曖昧であることに加えて、各都市の社会構造や、それと密接に関わる権力構造への関心が薄く、ギルドなどの職業団体や宗教的な相互扶助団体など、都市における諸団体や行政官職についての体系的な考察が欠如していることも要因として挙げられよう。各章での考察により、都市社会における人的な結びつきの重要性が浮き彫りにされながら、筆者のいう中間層が、これらの団体や婚姻関係などを通じて獲得していた都市共同体における位置づけや役割について、本書は明確にしていけないのである。また、史料から明らかになる中間層の行動や心性と、上層や下層のそれとの差異について考察されていないことも、中間層に焦点を合わせるという筆者の視点を分かりづらくしているともいえよう。むしろ、そうした階層区分を固定的に考えるのではなく、社会的な上昇という観点を取り入れて、都市のエリート層へ上昇を果たした、あるいは現在果たそうとしている階層を対象として設定し、分析した方がより説得的であつたのではないだろうか。

一方、これまで一般的であつた都市と農村との比較という視点ではなく、ヴェローナやヴィチエンツァといった地方都市をとりあげ、国際商業都市であるフィレンツェやヴェネツィアと対比させるという視点はきわめて妥当であり、有効であつたといつてよからう。結婚形態や相続慣習などにおいて、大都市とは異なる側面もあることが本書での考察から明らかにされており、それは、従来の研究成果から描かれた都市生活のイメージに修正を迫る

とともに、逆に大都市の特質を照射することになると思われるからである。また、地方都市と大都市に共通する要素が多いことは、そこから都市の一般性を指摘することを可能にしており、ここに、一般性を考慮しつつケース・スタディを積み重ねていくことの意味が十分に示されているといえよう。

さらに、地方都市と大都市との比較という視点は、都市国家から領域国家へと変貌を遂げていく近世イタリアの諸地域を考えるうえでも重要な視座を提供しえるのではないだろうか。たとえば、領域国家の形成は、ヴェネツィアやフィレンツェといった首都的な都市と地方都市との間にヒエラルヒー的な構造を生み出して、それを固定化するとともに、地方都市のエリート層のなかには、都市の枠組みを超えて首都的な都市へと進出し、さらなる上昇を求める家系も多く現れるようになるからである。その際には、第五、六章の紹介においても指摘したように、従来の都市間関係がそうした社会的上昇の方向性に大きな影響を与えることになろう。そうした点からも、本書のような領域国家の形成期における地方都市の日常性についての考察は、大きな意味を持つといえる。ただし、本書ではヴェローナやヴィチエンツァにおけるヴェネツィアの支配の影響についてはあまり意識されず、空間的な広がりも都市と農村所領に限定されている点は残念である。

そして、筆者が随所で指摘する宗教的・文化的な規範と現実の心性や行動との「ズレ」も、実はこうした地方都市へ着目するという視点からも考えることができるのではないだろうか。本書の対象が、中間層ではなく都市のエリート層とさえいえるような階層であつたことはすでに指摘した。よって、ここに現れてきた

「ズレ」は、都市における階層差を基にしたものというよりは、文化的・宗教的な中心における規範や運動を、地方都市の文脈から解釈し、それを選択的に受容した結果として捉えられるからである。もちろん、フィレンツェやヴェネツィアにおいてもこうした規範と現実との「ズレ」は看取されようが、それを単に階層差のみに帰すだけでなく、そこにそれぞれの都市に固有の事情を見出し、いわばそうした規範と現実との「ズレ」における地域差を考へることも、決して無意味ではないだろう。

四

これまで述べてきたように、本書における考察にはいくつかの批判されるべき点や疑問点を指摘することができる。また本書は、そもそも都市生活における非常に広範な領域をとりあげているために、全体として事実紹介的な側面が強く、それぞれのテーマに

ついて精密な分析がなされているとはいえない。とはいえ、それによって本書の持つ意義が損なわれるということにはなるまい。むしろ、ここで指摘しえた疑問点や問題点は、本書で示された成果を十分に吸収したうえで取り組まれるべき今後の課題というべきだろう。本書が対象としたヴェネト地方は、ヴェネツィアにおける本土領支配の展開やヴェネツィア貴族による土地所有の増大といった観点からも注目されている地域である。本書は、そこに社会史や家族史研究の成果を取り入れて、新たな視座を提示しえたといえよう。ともあれ、都市生活史や家族史研究においても、またヴェネツィア・ヴェネト史の領域においても、今後の研究に対して本書が重要な視点や情報を与えてくれることは間違いない。

(B5版変形 三四四+xvii頁 一九九六年 Baltimore and London,

The Johns Hopkins University Press.)

(京都大学大学院博士後期課程